Notes for Kanjinno Butaizakura

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1011

金沢大学文学部論集　言語・文学篇
第二十一号　二〇〇一年　一～三五

『勧進能舞台桜』注釈（一）

時代物浮世草子研究会
（木越　治・高島　要
・高橋明彦・村戸弥生
・木越秀子・穴倉玉日）

【はじめに】

本稿は、一九九八年十一月～一九九九年八月にかけて時代物浮世草子研究会においておこなった輪読会の成果を、木越治の責任においてとりまとめたものである。時代物浮世草子研究会については、『北陸古典研究』第14号（一九九九年10月）掲載の「多田南嶺『龍都俵系図』注釈（1）」に付した「はじめに・時代物浮世草子研究会縁起」を参照されたい。とりあえず、今回は、序と巻一の本文・注釈を掲載する。

延享三年（一七四六）正月八文字屋刊行の浮世草子『勧進能舞台桜』（全五巻）は、序文の署名こそ「八文字自笑・同其笑」となっているものの、実作者は多田南嶺であるというのが現在の通説である。中村幸彦氏は「多田南嶺の小説」（『中村幸彦著述集　第六巻』所収、初出は昭和15年）において、本作品を「構成才能を縦横に働かせ、警句地口の機知を極度に発揮した作品」

と評し、「南嶺をおいて、当時他の作者に求め得ないもの」と述べたうえで、具体的な文例を示しつつ「南嶺の代表作の一つ」と結論づけている。これをうけて長谷川強氏も『浮世草子の研究』（昭和44年）において、前年刊行の『阿漕浦三巴』同様浄瑠璃の『播州皿屋舗』（寛保七年七月十五日、為永太郎兵衛・浅田一鳥作、豊竹座上演）に拠るほか、歌舞伎の「若緑初面箱」（寛保三年十一月、京蛭子屋座顔見世）に想を得た部分もあることをなど指摘している。

本稿はこれらの諸先学の研究成果に基づきながら注釈を試みるもので、礎稿を担当したのは、

巻一の一　村戸弥生　　巻一の二　高橋明彦　　巻一の三　木越　治

である。

至らぬ点は多いと思いますが、諸賢の教示を心より期待するものです。

【凡例】

一　本稿は、延享三年正月八文字屋刊行の浮世草子『勧進能舞台桜』（全五巻）の注釈である。ただし、巻頭の「番組」は省略した。

二　底本は、長谷川強他編『八文字屋全集　第十八巻』（汲古書院、一九九七年刊）に拠った。詳細な書誌情報等はすべてこちらを参照されたい。

三　『龍都俵系図』注釈では、誌面節約のため作品本文を省略しているが、本注釈では、校訂本文を掲げることにした。その作成方針は以下のとおりである。

1　漢字は可能な限り現行の字体に直す。

2　底本の句読点はすべて「。」で区切られているが、適宜「、」「。」を区別する。

3　底本にない箇所でも、意味を取りやすいと思われる場合には、適宜「、」「。」「・」濁点等を補う。

4　人物の発言や心中思惟の部分には「　」を付す。

5　底本のルビはすべて生かすが、それ以外にもあった方が読みやすいと思われる箇所には適宜補う。

6　助詞の「共」、形式名詞の「事」等、仮名に開いたものがある。

7　全体として、日本古典文学を学ぶ海外からの留学生が、本文を読むことに関して抵抗を感じないような本文づくりをめざした。

四　注釈は簡潔をむねとし、できるだけ近い時代・近いジャンルの用例を掲げるように努めた。

五　用例本文は通行の字体を基本とし、ルビは必要と思われるもののみ（　）に入れて掲げた。

六　用例の出典表示は、〔近松・宵庚申〕〔秋成・妾形気〕など作者名を掲げるもの、〔咄本・喜美賀楽寿（安永六年刊）〕のようにジャンルと刊年を示すものなど一定していないが、あえて統一することはしていない。

七　各章の冒頭に、梗概を掲げた。

○序

【校訂本文】

とう〳〵たらりあがりちりやたらり、あがり所千代までおはしませ。われらも千秋さふらはふ。鶴と亀とのよはひにて、心に任する筆のすさび、浄瑠璃に擬て、鳴るはたきの水のたらぬことばをいひながす五巻のとぢめを五番の能にくみたて、いづれも様の御目にかけるぼしの紐も永き春駒、しやんこ〳〵といさみにいさんで、売ひろめんとは、あゝらやうがましや。サアラバ鈴をまいらせうと、うやまって申す。

延享三つ　　八文字

とらの　　翁　自笑

年始　　作者

同

三番叟　其笑

◆**とう〳〵たらり……鶴と亀とのよはひにて心に任する**　ここまで、謡曲「翁」の詞章を丸取りしている。

◆**心に任する筆のすさび**　筆のおもむくままに書いたもの。序文特有の謙辞であるが、「かへす〴〵たのみ置きて、はかなき筆のすさびにもかき残し」〔芭蕉・芭蕉を移す詞〕のごとくいくらか雅びな趣のある用語といえる。

◆**浄瑠璃に擬て**　解説でふれたように寛保七年七月十五日京都豊竹座上演の浄瑠璃の『播州皿屋舗』（為永太郎兵衛・浅田一鳥作）に拠ったことをいう。

◆**鳴るはたきの水**　同じく「翁」からの文句取り。

◆**五巻のとぢめ**　本来は、五巻の書物をとじた結び目の意。ここは、五巻全体をさす。

◆**五番の能**　能の上演形式の一つで、一日の番組を脇能物（神能）、修羅物、鬘物（女能）、雑物（物狂能）、切能物（鬼能）の順に上演するもの。能ではこれを正式のものとして神・男・女・狂・鬼にそれぞれ割り当てる。

◆**いづれも様**　皆様。「いづれも様への立分」〔近松・心中宵庚申・上〕「いづれも様のお志浅い深いもあらざれば」〔秋成・世間妾形気・二・三〕

◆**御目にかけるぼし**　「お目にかける」の「かける」に「掛烏帽子」

をかけたもの。「掛烏帽子」は掛緒（かけお）を用いないで頭に押し入れて、うしろの針だけでとめておく折烏帽子。「Caqeyeboxi（カケエボシ）〈訳〉日本人が式典とか祝祭日とかに着用する、ある種の布製の帽子」〔日葡辞書〕

◆**紐も永き春駒**　ゑぼしの紐が長いのと日が長いとを掛け、さらに日の長い春と続けて「春駒」を導き出している。「心のいさむ春駒乗て来る仕合の時津風」〔其磧・風流宇治頼政・五・三目録〕

◆**しやんこ〳〵と**　馬の鈴の音を表す語。「くつはの音はしやんこ〳〵。馬かたは思ひ〳〵にうたをうたひ」〔咄本・喜美賀楽寿（安永六年刊）・序〕

◆**あゝらやうがましや。サアラハ鈴をまいらせう**　ここも「翁」の末尾三番叟の舞の「あら様がましや候。さあらば鈴をまいらせう」による。

◆**延享三つとらの年始**　西暦一七四六年。丙寅。桜町天皇。九代将軍家重の治世。八文字屋はこの年他に『曾根崎情鵲』を刊行している。前年の十一月十一日には初代八文字自笑が亡くなっているが、この年には『賢女心化粧』『今昔出世扇』『阿漕浦三巴』などが刊行された。

勧進能舞台桜　一之巻

目録

【校訂本文】

高砂　狂言　入間川

第一　陽春の徳を備へし契情の姿

然れども此大夫は其気色取が第一にて

花葉時をわかぬ家老職の諫言

第二　遠く鳴尾の沖漕だ大尽

夜の鼓の拍子を揃たる末社がすゝめ

あらはれ出し身のさび落て行紙子一重

第三　入間詞は老人客のあしらい

にくいとはいとしさのあまりにて

責ふとは責まいとの古入道が恋路

◈**高砂**　謡曲。脇能物。世阿弥作。肥後国阿蘇の宮の神主友成が都に上る途中、高砂の浦で景色をながめていると、老人夫婦がやってきて松の木陰を掃き清める。そして、友成に高砂のと住吉の二本の松を相生の松といういわれや松のめでたいことなどを語って、舟に乗って沖に去る。友成が住吉に行くと明神が現われ、御代を祝って神舞を舞う。祝言曲として、結婚式などの祝儀の席でもよくうたわれる。

◈**入間川**　狂言。入間川にさしかかった大名が、物事を反対にいう入間詞を聞いておもしろがり、衣服や太刀などを与えるが、最後に、その入間詞であざむき、持物を取り返す。

◈**陽春の徳を備へし**　「陽春の徳を備へて南枝花始めて開く」〔高砂〕による。

◈**契情**　「傾城」に同じ。南嶺には多い用字。「契情狂ひに身を持崩し。勘当せられて」〔南嶺・今昔出世扇・二・三〕等。

◈**然れ共……花葉時をわかぬ**　「然れ共此松は、その気色とこしなへにして花葉時を分かず」〔高砂〕による。松は花の時期、葉の時期という区別がなくいつも緑の葉をつけている、という原典の意を転じて、いつもかわらず忠義を尽す家老、と続けたもの。

◈**気色取**　きげんをとること。「能おちつき気色（けしき）どり、いやあまり気色どるもわろし」〔談義本・当世花街談義（宝暦四年刊）・二・品三〕

◈**鳴尾の沖**　兵庫県西宮市東部。「波の淡路の島影や。遠く鳴尾の沖すぎてはや住の江に着きにけり」〔高砂〕

◈**沖漕だ**　「おきこぐ」は、技芸などがきわめてすぐれた境地に達すること。

◈**夜の鼓拍子を揃たる**　「夜の鼓の拍子を揃へて」〔高砂〕による。

◈**末社**　（「客」を「大尽」というのを「大神」に言いかけ、それを取りまく「末社」の意でいう）遊里で客の取り持ちをする者。太鼓持。幇間。「買手を大神といひ、太鼓を末社と名付け」〔都の錦・元禄太平記・一・二〕

◈**身のさび**　自分の責任。みずからが負わねばならないとが。「不慮の悪縁の。身の錆刀、夫の手で刃にかゝる」〔近松・堀川波鼓・中〕

◈**紙子**　紙で作った衣。和紙をコンニャク糊ではり合わせ，これをよくもんで柔らかにし，これに柿渋を塗って仕上げたもの。「御覧の如くやふれ紙子一重の境界」〔其磧・都鳥妻恋笛・二・一〕

◈**入間詞**　反対言葉。さかさ言葉。狂言「入間川」で有名。「総じて入間ごとばには、さかさことばを使ふにより、此所を深いといふは、浅ひといふこと、上へまはれといふは、ここをわたれといふことと、心へて」〔狂言記・入間川〕

◆にくいとはいとしさのあまりにて　ことわざ。「憎い憎いは可愛の裏」などともいう。口で憎いというのは愛するあまりのことだ、ということ。入間詞の例としてあげたもの。

○巻一之、

○陽春の徳を備し契情の姿

【梗概】

室町幕府の名家で播磨の国を治める赤松家の跡取り息子友仲が、なじみの都の大夫吉野の一行（かぶろの霞、引船の綱手、やり手のまん、幇間の才八・尺助ら）を引き連れて、別邸として新たに用意した桜屋敷で花見をしている。尺助の提案により、家代々の宝である珊瑚珠の盃で酒をくみかわそうということになり、皿を保管している家老餝間三郎左衛門のところに使いを出す。が、やってきた三郎左は皿のかわりに父友成の位牌を出し、友仲の遊蕩をいさめる。父友成は友仲が六歳の時に死去し、成人するまで家督は伯父の有馬円山が預かっているのだが、友仲の不行跡をいいことに、二十一歳になった現在においても全く返す気配がないどころか、かえって自分の子の蔵人に継がせてお家を乗っ取ってしまおうとしているのである。三郎左や同役の加古川右近は友仲のためにこの事態を非常に心配しているのであった。それがわかるだけに友仲は反論できない。

その後、三郎左は高使屋敷に京から高使が到着するので、友仲にもあとから来るように告げながら、出迎えるために出ていった。

【校訂本文・一】

今をはじめの旅羽織く、日もいとゞ猶ゆたけき。

「抑、是は播州日頃の大のら、遊びずきの大将友仲とは我事なり。我いまだ太夫と手を引て遠がけ致さず候ふ程に、此たび思ひたち、領分の浜めぐりと出かけ候。又太夫を入をく桜屋敷、普請が出来たると申し候ふほどに、出がけに立より一見致さばやと存じ候」

と、紫のくゝり頭巾、黒羽二重の三つがさね、無紋の羽織、大小の長からぬに粋とは見え、びかくする衣装をうれしがりし、たれほにまさき時代の恋しりとは各別の出たち、銀ぎせるの長張もたする様な、高のしれた物ずきにあらねば、小姓組お手まはりはいふに及ばず、底いたりなる風俗、末はるぐの都路もおよばず、いざしら雲のはるか段のちがふたる全盛。

桜屋敷に着給へば、高砂の松の春風も爪くはへるばかり、生身の松のくらゐ、都より引ぬかれて下りしよし野といふ太夫、かぶろの霞にたばこぼんさげさせ、引船の綱手、やり手のまん、太鼓持の寸八・尺助などいふおかし仲間まで一所に召かゝへられて、太夫さまの御伽奉公。よし野の名にめでゝ桜づくしの大庭、いろくの花もよし野にはけおされ、色なきがごとくにぞ見えける。太夫はうはぎゆりかけ、

「今日よりお下の浜ぐつれて御出との慰み、又あつた物ではござんすまい。まづさゝひとつ」

と青琅玕の醸鍋。いたりづくしの取ざかなは、身もちのよひ美人にひとしく、うまみはうすけれども、さしあたつてさはやかなる座敷に、引船が、

「太夫さまの袿の帆かげより、おあひ申し上げん」

と出れば、やり手が

「どふでも、けふは大酒」

と心の石づきをすへて、しやべる折こそあれ、さかりのさくら花、さそふ春風に吹まがひはらくとちりかゝりけるが、大尽友仲殿のもたせ給へる盃へうかびければ、人くゝ刈萱道心の故事を思ひ出し、

「大尽のめいつた心にともならせられては」

と案じけるに、おもひの外、大尽御機げんよく、

「見よや、皆の者ども、花一時といへども、無常の風は夕辺をまたず。何時死のふもしれぬは人の命。一寸先はやみの夜。又とむまれて来にくゐ此界。たのしまひで何とせふ。長からぬ世に物おしみするは愚く。ソレ牽頭どもに物とらせよ」

「うけ給はる」

とお側出頭の尾上弥文太、蜀紅の大財布よりみだけ小判つかみ出してまきちらせしは、はや山吹も咲そへしかと、椽側庭の飛石まで黄金世界とぞ見えにける。

大尽仰せ出さるゝは、

「太夫ことは此地にちか付きなく、たれをかもしる人にせん高砂のまつ身あればこそはるぐとたよりに下りし。何がな馳走に」

とのおことばにすがりて、京からつひてくだりし牽頭の尺助、

「おそれながら、こゝは太夫さま御所望なされて、御家の重宝、都までもかくれなき、珊瑚珠の皿盃にて、あつかんにして引きかけて見たいもの」

と、すゝめられ、見たひ様な顔付。国も山も取てゆけの若鳥大尽なれば、右の皿預り餝間三郎左衛門長能方へ

「名物の珊瑚の皿、早々持参すべし」

と、しきなみの御使。まつ間久しと又はじまる。

「酒もろともにいきた松を、ながめてくらすおもしろさ。それも久しき名所かな」

と、やり手が鼻のひくいを一興ざゝめく最中取ぐに

「御家老餝間三郎左衛門出仕」

との披露。いふてやつたはやつたれども、かたくなる家老殿には大尽もちとよはりめ見へ、

「是はく三郎左、子どもになりともたせば」

とのお詞。

「有がたし」

とおそばぢかくよりければ、牽頭ども

「コリヤだん那め、うきくされ、わつく」

と指のまたひろげてそゝのかすれば、三郎左衛門にがくしき顔色、

「个様なる乱心者ども召かゝへられての御用はいかゞ」

といはれ、蛭に塩辛くふて酒のまぬ心地し、みなくまぢめに見えにける。

◈**今をはじめの旅羽織く、日もいとゞ猶ゆたけき**　「今を始の旅衣、今を始の旅衣、日も行末ぞ久しき。」〔高砂〕による。

◈**旅羽織**　旅行をする時、塵よけのために着る羽織。「越前の国気比の浦へと旅ばをり」〔近松・傾城反魂香・上〕

◈**抑、是は播州日頃の大のら、遊びずきの大将友仲とは我事なり**　「抑、是は九州肥後国、阿蘇の宮の神主友成とは我事也」〔高砂〕のもじり。

◈**大のら**　大変ななまけもの。「エエ勘兵衛の大のらめ、何をしてけつかるぞ」〔浄瑠璃・双蝶蝶曲輪日記・四〕

◈**我いまだ……致さず候程に。此たび思ひたち……出かけ候**　「我未都を見ず候程に、此度思ひ立都に上り候」〔高砂〕のもじり。

◈**大夫**　遊女の最高位を示す階級名。京都島原で使い始めたといわれる。かむろ、新造らの専属部下かつく。

◈**遠がけ**　遠方まで歩きまわること。「遠がけして鷹かりなとゝ出働くこと毎度」〔庭鐘・繁野話・九〕

◈**領分**　江戸幕府において、一万石以上の大名の領地の称。目見え以上の領地を知行、目見え以下の領地を給地といったのに対する。「それがし領分の内三枝山といふに磁石あり」〔南嶺・教訓私儘育・四・一〕

◈**又太夫を入をく……立より一見致さばやと存候**　「又よき次なれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存候」〔高砂〕のもじり。

◈**桜屋敷**　桜の木をたくさん植えてある屋敷をこう称したもの。

◈**くゝり頭巾**　頭の形にあわせてまるく作り、ふちをくくった頭巾。多く老人、隠居などが用いる。「上座に二つぶとんしかせて、くゝり

頭巾めされしは」〔南嶺・忠盛祇園桜・一・一〕

◆**黒羽二重**　黒色に染めた羽二重。江戸時代、礼服や晴着として用いられた。「見れば当世仕立の男、黒羽二重の小袖に」〔其磧・傾城禁短気・四・三〕

◆**無紋**　衣服、用具などに紋が入っていないこと。「うへには無紋の小袖、目にたゝずしてなを心にくき物ぞかし」〔西鶴・好色五人女・五・三〕

◆**びか〳〵する**　つやがあって、いやみなほど光っているさま。ぴかぴか。「是はマア〳〵けつかうな。びか〳〵した鉄物（かなもの）のきる物めさつしやいた中へ」〔南嶺・魁對盃・四・一〕

◆**たれほにまさき時代**　未詳。

◆**恋しり**　恋愛の情趣を解すること。遊女との恋のかけひきなどに通じた人。「百とせに一とせたらぬとよみて枕をかはさんしたを世の恋しりとはいふではないかへ」〔秋成・諸道聴耳世間猿・三・三〕

◆**各別**　異なっている。「懇意の与八郎使者でござる。余人とは各別。こゝをあけて様子を」〔南嶺・忠盛祇園桜・四・一〕

◆**銀ぎせる**　江戸時代は、ぜいたく品の代表で、道楽息子を象徴する持ち物として使われる。「髪は本多に銀ぎせる、青黛ほそ眉うすげしやう、自ら大通の気どりにて」〔咄本・春笑一刻（安永七年刊）〕

◆**長張**　未詳。銀ぎせるの長いものか？

◆**高のしれた**　たかがしれた。たいしたことのない。「公に出たりとも、高のしれたる給金也」〔風来山人・根無草・後〕

◆**小姓組**　主君の側近に仕える小姓の総称。「居たる小姓組。近習組。並ゐし女中諸ともに」〔南嶺・丹波与作無間鐘・一・三〕

◆**お手まはり**　いつも身近に仕えて主人の雑用にあたる者。

◆**底いたり**　表面に出ないところが念入りにできており、精巧なこと。「それもあまり当世過る。ヤハリ空色にすみる茶のうらの底至りがよい」〔咄本・うぐひす笛（天明頃刊）〕

◆**末はる〳〵の都路もおよばず。いざしら雲のはるか……着給へば**　「末遥々の都路を、末遥々の都路を、けふ思ひたつ浦の浪、船路のどけき春風も、幾日来ぬらん跡末も、いさしら雲の遥々と、さしも思ひし播磨潟、高砂の浦に着にけり、高砂の浦に着にけり」〔高砂〕のもじり。都人にも劣らぬ粋な様子で、格の違った全盛ぶりである、の意。

◆**高砂の松の春風も爪くはへるばかり**　「高砂の、松の春風吹くれて」〔高砂〕のもじり。

◆**爪くはへる**　恥ずかしがるさま。「五寸ほど有小指の爪を咬へて辱しがる風情」〔一風・新色五巻書・四・一〕

◆**生身**　元来は仏語。ここでは、生きている、というほどの意。「謡曲石橋に、定基法師、天台山に登り生身の文珠を拝せんと石橋に詣る」〔劇書・秀鶴草子〕

◆**松のくらい**　遊女の最上位である大夫の位。秦の始皇帝が雨宿りした松の木に大夫の位（五位）を授けた故事にちなむ。「上品（じやうぼん）女郎の松の位」〔其磧・傾城禁短気・五・四〕

◆**かぶろ**　江戸時代の遊郭における少女の職名。七～八歳で遊郭に入り，十三～四歳まで太夫らの専従となった。

◆**引船**　江戸時代、上方の遊里で、太夫につき添って客席をとりもった女郎。「しきりの襖明させて、引ふねの女はあとにかへし」〔西鶴・好色一代男・六・五〕

◆**やり手**　遊郭で、諸事の取り持ち、また、遊女の監督や指導などをする女。遣手婆。「やり手がよく計の算用もきかず、いやしき物は手にもたず、禿が眠るをもしからず」〔西鶴・好色一代男・六・一〕

◆**寸八尺助**　寸尺は、ごくわずかの長さのこと。それを人名化したもの。

◆**おかし仲間**　酔狂な遊び仲間。また、その遊びを助ける幇間連中。「京中のおかし中間の集り。おかしからぬのは口惜」〔西鶴・好色二代男・二・三〕「また改めて此物語こそぐる程おかし中間の見るものぞかし」〔真実伊勢物語・序〕

◆**御伽奉公**　一晩中、仕えていること。

◆**大庭**　広い庭。「肌帯外（はづ）れ蹴躓（けつまづ）き、大庭指（さ）して出る時」〔仮名草子・竹斎・下〕

◆**ゆりかけ**　ゆらゆらさせながら垂らす。「冷泉雲の。上着を。ゆりかけて。新艘突出（つきだし）出立栄（でたちばえ）」〔近松・寿の門松・上〕

◆**あつた物ではない**　またとはないものだ。「雪のあけぼの。またあつた物でなしと。咄をきゐてさへ末社ども」〔南嶺・教訓私儘育・五・一〕

◆**さゝ**　酒。「先（まづ）今日は酒（さゝ）でもあがつて去（ゐ）んで下さんせ」〔其磧・傾城禁短気・五・四〕

◆**青琅玕**　青い色の、玉に似た美しい石。

◆**醸鍋**　燗鍋。酒の燗をするのに用いる鍋。

◆**いたりづくし**　至れり尽くせり

◆**引船が太夫さまの掛の帆かげよりおあひ申し上んと出れば**　大夫に

かくれて会おうとたわむれかけたもの。「高砂や、此浦船に帆を揚て、此浦船に帆を揚て、月諸共に出塩の」（高砂）をきかせているか。

◈**帆**　紋所の名。

◈**心の石づきをすへて**　未詳。気を晴らすことか。

◈**苅萱道心の故事**　筑前苅萱の庄松浦党の総領加藤左衛門重氏か、花見の折、春風に誘われて散り、盃に浮んだ桜の花びらを見て無常を感し発心し苅萱道心になったという、説経「かるかや」等で有名な話。

◈**めいつた**　気が滅入った。「酒の肴ものこらず精進、気のめいつた事ばかり」（咄本・新上筌（寛政十年序））

◈**無常の風**　人の命を奪うこの世の無常を風にたとえていったもの。「もしただいまも無常の風きたりてさそひなば、いかなる病苦にあひてかむなしくなりなんや」（蓮如・御文章）

◈**牽頭**　たいこもち。「せつかくためたる小判のこらず取出し、牽頭（たいこ）末社（まつしや）にまきちらして」（南嶺・教訓私儘育・二・二）のごとくこの漢字表記の例は南嶺作品にも多くみられる。

◈**お側出頭**　主君から特別の寵愛を受けて、主君の身近に仕えているもの。「御側出頭を鼻にかけて、出仕の諸大名を蔑にあいしらひ」（南嶺・丹波与作無間鐘・一・一）

◈**尾上弥文太**　尾上は兵庫県加古川市の加古川河口東岸の地名。尾上神社があり、境内の松は「高砂の松」「尾上の松」「相生の松」として知られ、桜の名所でもあった。

◈**蜀紅**　しょっこうの錦。中国明代を中心にして織られた錦。日本には多く室町時代に渡来。八角形の四方に正方形を連れ、中に花文・龍文などを配した文様を織り出したもの。

◈**みだけ小判**　乱れ小判。封をしないでばらばらのままになっている小判。「ばらばらとみたけ小判、百両あまり」（百笑楽日記・一・二）

◈**山吹**　金貨と色が似ているところからしばしばたとえて用いられる。「あげやの座敷は小判の花ふり、時ならぬ山吹の瀬をなし」（其磧・風流宇治頼政・一・一）

◈**たれをかもしる人にせん高砂のまつ身あればこそ**　誰をかも知る人にせん高砂の、松もおなじ友ならで」（高砂）による。もとは、『古今集』雑上の藤原興風の歌。

◈**何がな**　希望・願いにかなうものを、あれこれ思案する気持を表す語。何か、「茶碗みかきて、何がな、御馳走もかなと申し侍る」（西鶴・好色一代男・一・二）

◈**重宝**　家の宝物。「かの頼政の家の重宝」（其磧・風流宇治頼政・五・一）

◈**名物**　由緒のある品物。「七郎右衛門様お日利の名物今一度拝見いたし申たし」（秋成・諸道聴耳世間猿・一・二）

◈**珊瑚珠の皿盃**　珊瑚を加工して作った皿と盃。珊瑚を加工してできるものの多くはかんざし等の装飾品が多く、皿や盃は珍しい。

◈**若鳥**　年若い男。うふな男。純真なこと。「旦那三郎七三十に足らぬ若鳥なれと」（秋成・世間妄形気・二・二）

◈**餝間三郎左衛門長能**　餝間は飾磨に同じ。兵庫県姫路市南部の船場川河口にあり、江戸時代から姫路の外港として発展した。「長能」の名は「高砂」に「然るに長能（平安中期の漢詩人藤原長能のこと）か言葉にも」と出るのがヒントか。

◈**しきなみ**　あとからあとから。絶え間のない様子。「重波・頻浪しきなみ」（書言字考）

◈**酒もろともにいきた松を。ながめてくらすおもしろさ。それも久しき名所かな。**　「老の波も寄り来るや、木の下陰の落葉掻く、なるまて命ながらへて、猶いつまてか生の松、それも久しき名所かな、それも久しき名所かな」（高砂）による。「いきた松」は前出「生身の松のくらい」と同じく大夫吉野をさす。

◈**一興**　ちょっとした楽しみにすること。「住吉の汐干に遊ぶ一興」（其磧・傾城禁短気・五・四）

◈**ざゞめく**　がやがやとさわぐ。「皆打連れて奥座敷奥口ざゞめくばかり也」（読本・敵討連理橘・一）

◈**かたくななる**　融通のきかない。「しかも頑愚気質（かたくなきしつ）にもあらず」（秋成・世間妄形気・二・二）

◈**よはりめ**　困った様子。

◈**うきくされ**　浮いてください。楽しんでください。「くさる」は「呉れる」の尊敬語。

◈**わつ〳〵**　大声をあげて騒ぐ声

◈**指のまたひろげて**　太鼓持ちが物欲しそうに滑稽な手つきをするさま。太鼓持ちを一名「指の股ひろげ」ともいう。「よい酒飲んて阿頼耶（あほうぐち）たゝき、指の股ひろげれば、壱歩の二つや三つは心安くせしめる太鼓持も有り」（好色万金丹・四・二）

◈**蛭に塩**　恐ろしい人や苦手の人の前に出て、恐れ入るさまのたとえ。「花の露も日影うつれば蚊に塩ひるはしほしほとなれる朝顔」（狂歌・古今夷曲集・三）「いかな六郎平も、蛭に塩」（其磧・傾城禁短気・四・一）

【校訂本文・二】

「おそれながら、御家の重宝さんごの皿持参仕る様に仰下され候ふゆへ、持参仕たる」

と、高蒔絵の箱雲足の台にのせてさし出せば、

「いふてはやつたれども、小事いふて持ては見えまいと案じたるに、太夫への外聞なんと身がはゞを見やつたか」

と、いはれぬ所へ潜上がはりてうれしがらるれば、三郎左衛門つゝしんで箱をひらき、三重の巾物内匣の覆をとれば、珊瑚の皿はこれなくて、「春林院東風大禅定門」と書付たる位牌を取出し、台にすへ、手にさゝげて、三郎左衛門上座になをれば、父の戒名、若殿友仲おぼえず首をさげ給へば、三郎左衛門位牌をさゝげながら、

「コレ若殿、三郎左衛門が申すことではござらぬ。御はてなされた大殿友成様、御戒名は春林院殿の御意。

ヤアこなたはノウ、なさけなや。此赤松の御家は尊氏公御開国のみぎり、格別の勲功によりて播州一円に下しをかれ、その上当家は村上源氏の嫡々、御先祖具平親王へ父帝村上天皇より下しをかれし珊瑚の皿と申すは、わたり八寸ふかさ三寸の円皿。かゝる大の珊瑚珠、呂宋・阿瑪漢にも聞をよばず。そのうへ是にひとつの不思議ありて、此皿を海へむかひうつふけて影をうつせば、三拾町四方は立どころに干潟と成り、あふのけてかげをうつせば、其干潟たちまち潮みち来れり。故に干珠満珠の玉皿と名づく。是そのかみ神功皇后三韓責の時、宇佐の神の霊夢によりて、龍宮より献ぜし宝物なれば、尊氏公も御所望有て拝見なされしにも、吉日良辰を撰給ひ、三日御潔斎あり。

其上赤松代々の継めは、此玉の皿を証拠に上京いたすべき旨仰せ出され、其のち御代々の御つぎ目は、此玉皿を以て相すむ程

の宝物。今更申さいても御存知の御事。

此位牌春林院殿御死去のみぎりは、こなたには未六歳。此播磨国は西国のおさへなればとて、京都よりも大切に思召、伯父御一有馬人道円山様に看抱のうしろみ仰せ付けられ、家の重宝玉の皿は、家古き家老の内へ預り、何事も円山と家老ども相談つくにて国務をとり、友仲成人に及びなば、家督願ひ申すべしとの御指図を以て治め来る所に、はや廿一歳に御なりなさるれども、御身持取じめなく、忍びての京かよひ。不行跡者と有りて、円山様より御家督の願ひ仰せ上げられず。

コレ、よふ御合点なされい。此一国はこなたの物。御家督御相続の上は、ハテ御大名じや物、お心まかせの御なぐさみは、世上へもれぬ様にいたしかたも有べし。伯父御円山様の日頃の御心入れ、よく知つて御座りながら外のきこえもはゞかり給はぬ此桜屋敷。その上、御代々の御重宝を、どこのうしの骨やら馬のほねやらしれぬやつらが慰み酒の盃にとは、天命につきさつしやれたか。

大殿の臨終まで、わたくしと相役加古川右近とをめされ、『過来し世々のしら雪と、きゆる命はおしからずとも、老の鶴のねくらに残すおさな子、世に立てくれよ』との御遺言　草木心なしとは申せども、花実の時をたがへず。子として親の心をつがざるは、草木にもおとりし御心　大殿の直の御異見と思し召して、貞てわたくしが申すことの葉ぐさの露の玉、お心をみがくたねともなして下されかし」

と、涙をながしいさめければ、友仲なみだにくれられしが、わかげとて、とかく太夫引舟に外聞きのどく、

「身が女房にもと思ふてよびむかへし太夫を、馬の骨牛の骨とのあてこと、主人へ対して無礼の一言」

と、そりを打つていからるれば、

「サア、御心まかせにあそばせ。コヽあそばせ。所詮そのお心では此一国は伯父御円山殿の御子息有馬蔵人殿の物となるは目の前。いきておもしろからぬ世界、サア、あそばせ」

とくび筋なであげすりよれば、友仲あとへもさきへもゆかづ、無念がり給ふを、太夫は

「アヽ聞てはおまへの御ため、わしが爰に居ては御身のあたとなること。御いとま下されませい」

とあれば、三郎左衛門おさへて、

「イヤ〳〵、若殿の御心のかゝりし御自分、それほどのことは拙者が工夫して、伯父御様のお耳にいらぬ様にはからふべし。末社とやら末寺とやらんいふ者どもは、是より都へ帰るべし。金子は拙者がよき程にくれて上さん。

今日は京都より高使何事の御用かはしらず、案内なしに御着との御事。円山様ははや高使屋敷へ御出むかひなるに、若殿へ御しらせなきもがてんゆかず。早々御拵なされて高使屋敷へ御出なさるべし。私はお先へ参り、あれにてまち申さん」

と、御いとま申し、門前につながせしさめなる駒にうち乗て、むち風にまかせつゝ、高使屋敷へ行にけりやく。

◆**高蒔絵**　蒔絵の技法の一種。模様を高く盛り上げたもの。「文をそへ高蒔絵の文箱に入たる」〔南嶺・忠盛祇園桜・二・二〕

◆**雲足の台**　雲形にかたどった机や台の脚。「能の祝儀のおくり物……花の時節は杉折の雲足・蝶がた・州崎形」〔浄瑠璃・傾城酒呑童子・四〕「時服台三位以上は雲足なり」〔随筆・幕朝故事談〕「くもあし雲脚の台は禁中院中へ捧る物の台也」〔和訓栞〕

◆**小事**　叱ること。意見。「弟子のうたひかたに。小事いふたぐひとひとしく」〔南嶺・大系図蝦夷噺・二・二〕

◆**太夫への外聞なんと身がはゞを見やつたか**　太夫に対して羽振りよく見えるようにはからってくれたか。「はゞ」は羽振りに同じ。「すこしすしに見えて、幅のなき男はおそれてあふ事希也」〔西鶴・好色一代男・六・一〕

◆**いはれぬ所へ潜上がはりて**　特に言わなかったところにまで先走って気を配ってくれたので。「潜上」は、臣下・使用人などがさし出た行ないをすることをいう。

◆**巾物**　袱紗に包んだもの。「うすむらさきの服紗物より瞿麦（なでしこ）の紋所ありし爪出して」〔西鶴・好色一代男・三・一〕

◆**春林院東風大禅定門**　「春の林の、東、風に動き」〔高砂〕による。この部分は長能の詩句によった部分。

◆**大殿友成様**　友成の名は、「抑是は九州肥後国、阿蘇の宮の神主友成とは我事也」〔高砂〕とあるのを生かしたもの。

◆**赤松の御家**　鎌倉・室町時代、播磨一帯を治めていた武将。

◆**尊氏公御開国のみぎり、格別の勲功によりて播州一円に下しをかれ**

南北朝期、足利尊氏によって赤松則村が播磨、範資が摂津の守護職に任ぜられたことをさす。さらに則祐の代に備前、明徳の乱後義則が美作の守護職を得、義則、満祐は侍所所司として幕府の中枢に参加、強力な守護大名となった。

◈**尊氏公**　足利尊氏。室町幕府初代将軍。建武五年（一三三八）八月将軍となるが、南北両朝に分かれて国内は治まらず、直義、直冬らとの争いが続いた。嘉元三（一三〇五）～延文三年（一三五八）

◈**御開国**　はじめて国を造ること。建国。

◈**村上源氏**　村上天皇の子具平親王より出た賜姓源氏。師房以下、長く公家社会にとどまって栄えた。堀川・久我・土御門・中院、さらに久我家からわかれた六条・岩倉・千種、中院家からわかれた北畠の諸家がこの系統に属する。

◈**具平親王**　正しくは「ともひらしんのう」。平安中期の文人・歌人として著名。後中書王と称される。和歌は『拾遺集』以下の勅撰集に、詩文は『本朝文粋』などに見える。

◈**村上天皇**　第六二代天皇。父は醍醐天皇。華やかな後宮を背景に宮廷文化が栄え、その治世は、後代「天暦の治」とたたえられた。

◈**呂宋**　フィリピンの古称。「呂宋　ルスン」〔続無明抄・下〕「呂宋ルスン」〔書言字考〕

◈**阿瑪漢**　ポルトガル領マカオの古称。室町時代、ポルトガル人がここで貿易をはじめ、長崎と交通した。「阿媽港　アマカハ」〔書言字考〕

◈**干珠満珠**　以下に引く『太平記』の他、『八幡愚童訓』などに詳しい。「やがてこれを御使にて、龍宮城に宝とする干珠（かんじゅ）・満珠（まんじゅ）を借り召さる。……戦ひ半ばにして雌雄いまだ決せざる時、皇后まづ干珠を海中に投げ給ひしかば、潮（うしほ）にはかに退いて海中陸地（ろくぢ）に成りにけり。三韓の兵共、天我に利を与へたりと悦びて、皆舟より下り、徒立（かちだち）に成つてぞ戦ひける。この時にまた皇后満珠を取て投げ給ひしかば、潮（うしほ）十方より漲（みなぎ）り来つて、数万人の夷（えびす）ども一人も残らず浪に溺れて亡びにけり」〔太平記・三十九・神功皇后新羅を攻め給ふ事〕。なお、「浪は霞の磯隠れ」「音こそ塩の満干なれ」〔高砂〕などとある。

◈**吉日良辰**　日がらのよい日。特に仏教で、星宿の法により仏事を修すると、広大な福徳善根を得るという日。「吉日良辰をゑらび、輿入のことふき三々九度も」〔南嶺・教訓私儘育・三・三〕

◈**継め**　家督を相続すべき人。また、そのための証拠となるもの。「行房の病体明日も知ねば、とかく継目（つぎめ）が大事なれば」〔其磧・都鳥妻恋笛・二・三〕

◈**有馬入道円山**　有馬は神戸市兵庫区の温泉町。六甲山の北面にあり、古くから知られた山紫水明の地。

◈**看抱のうしろみ**　監督者。後見人。「勘七善三郎なんどかんばうのうへは、いかなる人の息女にてもよびかぬる事有まじけれ共」〔浮世草子・御前義経記・七・三〕

◈**国務**　藩の政治向きのこと全般。「加賀守にぞなされける。国務をこなふ間」〔平家物語・一・東宮立〕

◈**取じめなく**　しまりがなく。「無理まじりに歌の三味線の只やかましくなって、取じめなく」〔西鶴・好色一代男・三・一〕「されどもお橋が取じめもなき栄曜（ゑよう）気ずいは日増夜増にて」〔秋成・世間妾形気・四・二〕

◈**不行跡者**　素行がよくない者。「此坊主は母の弟にして、我為には正しき伯父なれども、不行跡者にて親兄弟諸一家困を切て、勘当せし法師なれば」〔其磧・都鳥妻恋笛・一・三〕

◈**お心まかせの御なぐさみは、世上へもれぬ様にいたしかたも有べし**　（家督を継いで大名になってしまえば）好きなように遊んで世間に知られないようにする方法はいくらもある。

◈**心入れ**　性格。考え。「其の娘御の心入れは知らねども」〔近松・国性爺合戦・三〕

◈**天命につきさつしやれたか**　天からも見放されたか。「いづれ天命にもつきらるへき行跡」〔其磧・風流宇治頼政・二・三〕

◈**相役**　自分と同じ役目の人。同役。「天下の大老たる御方と、相役に仰付らるるを」〔近松・曾我五人兄弟・二〕

◈**加古川**　兵庫県南部、加古川の形成する三角州上に発達した都市。古代には山陽道の賀古駅が置かれていた。現在の市街地は加古川左岸の渡船場として栄えた鎌倉時代以降に発達したもので、江戸時代には本陣が設けられ、宿場町、河港として重要であった。

◈**過来し世々のしら雪と、きゆる命はおしからずとも、老の鶴のねぐらに残すおさな子……草木心なしとは申せども、花実の時をたがへず。……ことの葉ぐさの露の玉、お心をみがくたねともなして**　いずれも「過来し代々は白雪の」「積もり積もりて老の鶴の、塒に残る有明の」「夫草木心なしとは申せ共、花実の時を違へず」「言の葉草の露の玉、心を磨く種となりて」〔高砂〕の文句取り。

◆**わかげ**　若気。年若い人の血気にはやる気持。若者の無分別な気持ち。「若気のいたりにて。十ケ年以前浪人いたし」〔南嶺・魁對盃・三・二〕

◆**あてこと**　いやみ。皮肉。「恥かしやなどあてことの言の葉ぞ面目なくも思ひけるかな」〔仮名草子・仁勢物語・下・四九〕

◆**そりを打て**　刀の鞘に手をかけてすぐ抜けるように身構え。「「是は近比迷惑といはせずせぬにおゐては一寸も轡らせぬがと刀に反を打ば」〔西鶴・武道伝来記・八・三〕

◆**サア、御心まかせにあそばせ。コゝあそばせ**　自分の諫めが気に入らないなら、どうぞすぐに首を討ってください、と居直り詰め寄る様。

◆**あとへもさきへもゆかづ**　どうにもならないさま。

◆**御自分**　ここは二人称。「ムゝ御自分は班女の実父なるとや」〔其磧・都鳥妻恋笛・二・一〕

◆**末寺**　本山の支配下にある寺のことだが、ここは、「末社」からの連想による。

◆**高使**　公使に同じだが、幕府の高家が使いとして来ることも含めて用いたものか。

◆**御着**　御到着。「大将の先達で御着のよししらせ申やうに」〔南嶺・魁對盃・二・二〕

◆**拵**　服装。「身の廻りの拵に大分金銀入ゆへに」〔其磧・都鳥妻恋笛・二・二〕

◆**私はお先へ参りあれにてまち申さんと……駒にうち乗て。むち風にまかせつゝ、高使屋敷へ行にけりやく**　「住吉に先行て、あれにて待申さんと、夕浪の汀なる、海士の小舟に打乗て、追風にまかせつつ、沖の方に出にけりや、沖の方に出にけりや」〔高砂〕のもじり。

◆**さめ**　毛の白い馬。「黄糸の鎧に筋兜、黒き母衣かけ、さめなる馬に乗ったる武者は誰やらん」〔浄瑠璃・頼光跡目論・三〕

○巻一之二

○遠く鳴尾の沖漕ぎ大尽

【梗概】

京からの高使住吉左京大夫（足利家の高家）を出迎えたのは、当国のうしろ見有馬入道円山と家老の餝間三郎左衛門・明石梅軒・加古川左近であった。住吉左京大夫の娘と友仲はいいなづけであったが、友仲不行跡の報告が円山より届いたため、婚礼はあきらめ、友仲を京に連れてくるように命令する。さらに、この間円山父子を国主同前に扱うことと、家宝の皿を京都へ持参するようにとも言い置く。左近・三郎左は友仲の身を守るため高使と対面のため邸に来た友仲を難波に落ち延びさせた。

【校訂本文】

我見ても久しくなりぬ、住吉左京太夫といふは、足利家の高家にして、此度にはかの高使を承り、はるゞ〳〵播州にくだり給ひ、御馳走屋敷掃除はひかりかゝやくばかり。玉もかるなる岸陰の御殿にてさまゞ〳〵の饗応。当国のうしろ見有馬入道円山、家老餝間三郎左衛門長能、明石梅軒、加古川右近をはじめ、「高使の旨いかゞ」と相詰ける。

住吉左京太夫申出さるゝは、

『故友成殿国政正しく、近国迄手本とも呼れし跡なるに、只今の友仲、わかげとは申ながら、不行跡のふるまひ、『何卒』と異見いたされても領掌これなく、日々に超過し、此間は京都より契情を請出し、さくら屋敷と名付、世間へもはゞからぬ身持。伯父としても力におよばぬに付、伺ひ奉る』と、円山殿より数度のうかゞひ。仁木細川のともがらも、何程かきのどくに思はれぬれども、是非なく高聞に達しける所。某儀は故友成殿存生の内より内約いたし、友成殿死去の節は、手前娘は三才なれども、悴がよめにとの所望。上へも申上てきはめ置たれば、友仲殿は手前が花むこ、娘和哥のまへ事も、当年はや年よはながら十八公の松のみさほかへぬ心。当暮には御相談申て婚礼をも取結び申たき心にて罷在所に、此間君よりめされ、『播州赤松の惣領友仲不行跡に付て、後見円山入道より度々の内窺。赤松の家は各別の勲功もあれば、御つぶしなさるゝ事は成がたきによりて、友仲事いまだ婚礼はせずとも、縁者によりて其方へ預る間、直に罷下り、籠乗物にしつらひ召つれ上るべし。其上円山入道は家をも国をも大切にぞんじ内窺いたす所に、家古き家老ども諫言をもいたさざるや。それにても改めずば、ナゼ言上は致さゞるや。急度仰付らるべけれども、此たびは御ゆるさるゝ間、向後万事は円山入道下知に随ひ、重て仰出さるゝ迄は、円山の父子を国主同意にかしづき申べし。扨又円山父子は近日御指図次第。当家の重宝玉の皿を京都へ持参致さるべし。其うへにていか様とも仰付らるべ

き』

よし、厳儀に申渡さるれば、円山はぞくく悦び、「もはや、してやつた物」と、心の内にゑみをなせども、

「甥友仲儀、何とぞ御威光を以て行跡もあらたまる様にと存じ、内々うかゞひ奉りし所、存よらず私父子へ国主同前との儀いたみ入」

と作りきのどく。

「其上、悴蔵人儀は此間病気に付、私領摂州有馬へ入湯仕り罷あれば、此老人一分にて御受申上るも至極憚入奉る」

と、おとなしげにいへば、家老明石梅軒すゝみ出て、

「是申、円山様。わか殿友仲様の身持、やかねば直らぬくさり物。御家が大事で御座りまする。御先祖への孝行をおぼし召し御請仰上られよ」

と、内証はぐるの佞人が腰おすを、加古川右近・餝間三郎左衛門ことばを揃へ、

「若殿の御身持京都へ仰つかはさるゝ程の儀、何として私共へは御沙汰下されざりしや。尤御わかげにて御遊興ないとは申されねども、国の政にさへる程の儀はかつて是なし」

とせけば、高使住吉太夫、

「イヤ、是く家老中、もはやかへらぬ事でおじやる。友仲を是へまねかれよ」

と、用意の籠のり物かき入さすれば、三郎左衛門も右近もむねをせめ、「全く是は円山が仕わざにて、蔵人を世にたてんとのたくみなれば、高使住吉殿とても油断はならず。わが娘をよびむかへず、契情を受出せし意趣に、円山と内くは一味かもしれず」

とはおもへども、さし当つて高使とて京都の仰をうけ給はりし人に対し、慮外も成難く、胸をさするばかりなり。

三郎左衛門、右近に向ひ、

「合点か」

といへば、右近うなづき、

「高はしれてあれども」

といふ一言に万物のこもる心あり。「おのれ、いか程にたくむとも、友仲様を世にいださずばをくまひ」と、両人がむねと胸に小し合す。げにも忠臣は異国にも本朝にも万民是を賞翫するもことはりなり。

かくともしらず、わか殿友仲は上下あらため、供廻り美々敷高使へ対面のため来かゝりしが、三郎左衛門右近がしらせにて、三郎左衛門若党、高使屋敷の門にひかへ、

「とかく此所へ御入なされてはよろしからず、是より難波へ忍びて立のかせ給ふべし。あらましはかやう〳〵」

と、立のかるゝ当分のあてどまで申上れば、友仲おどろかせ給ひ、

「三郎左・右近などがいさめを用ひず、我儘にはたらきし身のはて。とかく両人がさしづにまかせん」

との給ふ所へ、又々内より若党立出、

「右近申上まする。お立のきなされたと申事がしれましたらば、出口〳〵へ追手がかゝり、むつかしふ御ざりませふ程に、是を召れて人もつれず、物まぎれ候て御のきなされよ」

と、いかゝして才覚しけんや、給紙子に古あみがさをわたせば、小袖羽おりぬぎすて、是を着かへ、

「かくなりはてゝも、太夫が事気づかはし。皆の者ども、たのむ」
と、出ゆくを、小姓だちの侍ども、
「せめて御供」
とすがるを、
「それでは三郎左・右近が心入れもかなはじ。エゝ両人が異見を只今用る様に、マァ四五十日はやふ用ゆれば、かうはならぬ物を」
と涙を流せば、御小姓組の尾上弥文太さゝやく様に、
「云てもお大名の門出じや」
と小声になり、
「誠なり。松の葉の散うせずして色は猶、正木のかづらながき世をまつて御らんなされませい」
と、諷やらなきごとやらおいさめ申せば、
「気遣すな。追付帰参の盃をさすかい難波でしんぼうし、両家老が智恵を以て悪魔を払ひ治るを、松風の声もろともにわかれつゝ、立のき給ふぞいたはしき。

◆**我見ても久しくなりぬ**　「われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世経ぬらん」〔謡曲・高砂〕による。もとは伊勢物語一一七段・古今集九〇五番などに出る和歌。「住吉」の序として用いたもの。
◆**住吉左京太夫**　住吉は摂津国の古郡名。住吉大社がある。
◆**高家**　表面的には足利家に仕える名家の意で用いられているが、江戸幕府において、吉良・畠山・織田・武田などの足利以来の名家が任じられた身分兼職名をきかせている。
◆**御馳走屋敷**　使者をもてなすための屋敷。そのために特に屋敷がもうけられていたわけではあるまい。
◆**玉もかるなる岸陰の**　「玉藻刈るなる岸蔭の。松根によつて腰をすれば」〔謡曲・高砂〕による。
◆**明石梅軒**　「明石」は兵庫県南部の市。また淡路島を経て四国への

連絡路として古くからの要地であり、江戸時代は小笠原氏十万石の城下町として栄えた。

◈**領掌**　了承すること。「Riojo（リヤウジヤウ）うけがうこと」〔日葡辞書〕「有がたしと領掌申し、祇園の石檀筋を上へと急ぐも」〔南嶺・忠盛祇園桜・一・二〕

◈**超過**　度が過ぎること。「入道殿悪行超過し。閻浮第一の大仏を。焼きほろぼし給ふ咎によって」〔近松・平家女護島・四〕

◈**伺ひ奉る**　どうしたらよいかお教えください。

◈**仁木・細川**　いずれも足利家に仕える名家。

◈**高聞に達し**　将軍の耳にはいり。「かうぶん　高聞」〔書言字考〕

◈**上**　将軍。

◈**きはめ置たれば**　きめておいたので。

◈**年よは**　若いこと。

◈**十八公**　松の異名。「松」という漢字を分解したところからの文字遊び。「中にも此松は。万木に勝れて。十八公のよそほひ。」〔謡曲・高砂〕による。

◈**内窺**　うちうちの相談。

◈**勲功**　幕府に対する功績。

◈**籠乗物**　ルビは「のりもの」たけだが、「ろうのりもの」の意で、罪人を乗せて運ぶ駕籠のこと。唐丸籠。「新九郎義切腹仰せ付けられ、皆指をさし、籠乗物（らうのりもの）に押入らるる面影を笑ひぬ」〔西鶴・武家義理物語・六・一〕。

◈**急度**　きびしく。厳重に。「女中方をも急度御吟味仰付らるべし」〔其磧・都鳥妻恋笛・一・一〕

◈**国主**　戦国時代から江戸時代にかけて、一国以上を領有していた大名をいう（実際には一国以上を領有していなくてもその格を与えられたものもあり、十八家、二十家、十四家などと変遷があった）。「国主の艶妾」〔西鶴・好色一代女・一・三〕「こくしゅ　国主」〔書言字考〕

◈**同意**　同じとみなすこと。同然。「強弩（きやうと）の勢ひも、放したる末にては、魯縞（ろかう）の薄きを通さぬと同意」〔庭鐘・繁野話・四〕

◈**かしづき**　主人として大事に仕え。

◈**厳儀に**　おごそかに。

◈**ぞく〳〵**　嬉しさに心がうきたつさまを表す。「いで打出んと御悦び。兼任ぞくぞく小踊りし」〔浄瑠璃・源平布引瀧・五〕「通路が嬉しさ。兄弟もあれほどちがひのある物かと。ぞく〳〵すれば」〔南嶺・魁対盃・三・二〕

◈**してやつた物**　思い通りにうまく片付いたこと。る。首尾よくやりおおせる。「してやったり」の形で感動詞的に用いることもある。「なんでも衣類や銀は、してやつた物じや」〔咄本・露五郎兵衛新はなし（元禄十四年刊）〕

◈**同前**　前出の「同意」に同じ。同然。「我君頼朝公の御為には。伯父も同前」〔南嶺・魁對盃・一・三〕

◈**作りきのどく**　気の毒なふうを装うこと。

◈**私領**　幕府直轄の天領に対して、大小名の領地。

◈**おとなしげに**　穏やかに。落着いて。

◈**くさり物**　性根が腐っているもの。

◈**ぐる**　示し合せてたくらみをなす仲間。「目代になる此の乳母はくる也」〔近松・鑓の権三重帷子・上〕

◈**腰おす**　他人に力を添えること。悪いことにいうことが多い。「悪性があったらば此の姑が悋気の腰押」〔近松・鑓の権三重帷子・上〕

◈**さへる**　妨げる。邪魔する。

◈**かつて**　（否定を伴って）全く〜ない。

◈**せけば**　意気込んで反論したところ。「井の内にも死がいあると、車にてつりあげさせよくみれば。出石文九郎たれが打て立のいたとめつたにせけども」〔南嶺・丹波与作無間鐘・四・三〕「せ・せる音、せはし、せがむ、せちがふ、せつなし、せむる、せく。関をせきと云もせきとむる心也。せふる川の瀬もせる処を云ふ。背の方は腹の様にゆたかならず。」〔南嶺・伊呂波声母伝〕

◈**おじやる**　補助動詞「ある」の丁寧語。こざる。「お出である」の変化した語という。中世末から近世期にかけて用いられた。「丹波の家の法でおしやるかといへば」〔南嶺・忠盛祇園桜・五・一〕

◈**世にたてん**　一人前の人間にする。ここは、赤松家の後継とすること。「かれらを世に立てんと思ひて」〔曾我物語・三〕

◈**意趣**　「意趣がへし」のこと。仕返し。恨みに報いること。「昨日の意趣に一番参ろか」〔源内・神霊矢口渡・一〕

◈**慮外**　無礼なこと。礼を失するふるまい。「身にたいしての慮外かんにんせぬと。抜打に切てかゝるを」〔南嶺・忠盛祇園桜・五・一〕

◈**一味**　仲間。味方。「真先にすゝむは。城崎弾正。つゞいて城崎一味のともがら」〔南嶺・丹波与作無間鐘・五・三〕

◈**胸をさする**　怒りをおさえる。「随分むねをさすつて堪忍して」〔其

磧・風流風流宇治頼政・四・三〕

◆**高はしれてあれども**　陰謀の底は割れているのだが（いまはどうにもできない）。

◆**忠臣は異国にも本朝にも万民是を賞翫するもことはりなり**　「千秋の緑を為して。古今の色を見ず。始皇の御爵に。あづかるほどの木なりとて異国にも。本朝にも万民これを賞翫す。」〔謡曲・高砂〕による。

◆**美々敷**　豪華に。立派に。「出立の日熨斗目（のしめ）大小立派に伴廻り美々敷」〔秋成・諸道聴耳世間猿・一・一〕

◆**あてど**　めあて。心当り。「どうじや。貴さまも追出されたか。是からどつちへ行ぞい。いやも、どつちといふて、あてどはない」〔咄本・新噺庚申講（寛政九年刊）・一〕

◆**若党**　江戸時代、武家で足軽よりも上位にあった小身の従者。「是を手本にして流行出せば。四枚肩に若党美々敷」〔南嶺・今昔出世扇・五・三〕

◆**袷紙子**　裏地のついた紙衣。「誠の正体見給へと。小袖くるりと脱ぎければ肌に袷（あはせ）の破（やれ）紙子」〔近松・夕霧阿波鳴門・上〕

◆**小姓だち**　小姓から取立てられた者。小姓あがり。「源三位頼政の小姓立猪隼太」〔近松・雪女五枚羽子板・もんさく系図〕

◆**云てもお大名の門出じや**　忍んで落ち延びるとはいっても大名の出立であることに変わりはない。

◆**松の葉の散うせずして色は猶。正木のかづらながき世をまつて**　「暁かけて。霜はおけども松が枝の。葉色は同じ深緑立ちよる蔭の朝夕に。かけども落葉の尽きせぬは。真なり松の葉の散り失せずして色はなほまさきのかづら長き世の。たとへなりける常盤木の中にも名は高砂の。末代のためしにも相生の松ぞめでたき」〔高砂〕による。ここは、門出を祝して実際に「高砂」を謡っているところ。

◆**帰参の盃**　無事帰国できたときの祝いの盃。

◆**さすかい難波で**　「盃をさす」に「さす腕（かいな）」を掛け、「難波」と続けたもので、次項に引く高砂の「さす腕（かいな）には…」をきかせたもの。「さすかいなには悪魔をはらひ。おさむる手には。寿福をいざ」〔南嶺・忠盛祇園桜・五・二〕

◆**悪魔を払ひ治るを松風の声もろ共にわかれつゝ。立のき給ふぞいたはしき**　「さて万歳の。小忌衣。さす腕には。悪魔を払ひ。をさむる手には。寿福を抱き。千秋楽は民を撫で。万歳楽には命を延ぶ。相生の松風颯々の声ぞたのしむ。〳〵。」〔高砂〕による。ここの「松風」には「待つ」が掛かっている。

○巻一之三

○入間詞（いろまことば）は老人客（らうじんきやく）のあしらい

【梗概】

左京大夫は友仲が挨拶にあらわれないことに対して不満を述べるが、左近・三郎左は時間稼ぎをしている。そこへ、梅軒の息子明石貫左衛門武冬らが大夫の吉野とその一行に縄をかけてあらわれ、友仲は行方不明であることを伝える。円山は大夫らの詮議をはじめるが、吉野の美しさのとりことなってしまう。吉野も円山が自分に恋した様子を見て取り、やさしい言葉をかけて取り入ったので、自分ひとりで吉野を再度吟味するという口実で自分の隠居屋敷へ連れていくことになった。三郎左・右近も円山に忠誠を誓うと言う入間詞であざむき、円山の口から高使左京大夫にのちほど友仲と家宝の皿をいっしょに京へ持参するので、ひとまず先に京へ帰ってもらうようにと言わせることに成功し、ひと

まずこの場はおさまった。

【校訂本文・一】

「かくれもない大名が高使としてか様に都より下りしに、何とて友仲には是へ出られぬぞ。はやく出らるゝ様にいたさるべし」

と、住吉左京太夫機げん損じければ、円山入道

「御尤千万」

と、三人の家老に申渡せば、中にも明石梅軒罷立て、若殿友仲殿を引立てまいるべしといへば、右近三郎左衛門ことばをそろへ、

「仮令高使住吉様御預りとあればこそなれ。相もおとらぬ大名と大名。追付御出も有べし。貴殿お迎ひに参らるゝには及ぶまじき儀」

と一刻も若殿をおとしまいらする為に隙をとらんとすれば、梅軒かぶりをふりて、

「住吉様の仰は京都の御下知ならずや。是非引立て御渡し申が、御家のため」

とあらそふ所に、梅軒が悴明石貫左衛門武冬、広間の方よりすゝみ来りて、

「アゝ是〳〵おやぢ様、あらそひ給ふな。最前『わか殿を取にがすな』と内証から若党をつかはされ［し］ゆへ、桜屋敷へ参りたれば、『こゝもとへ御出』との事。ぼつ付きたれどもはや跡を見せず、かけ落召れたはよく〳〵身にわるひ事の覚えありてと見えたり。若殿の行衛は此たびよびくだし召れた契情めが知つておらうと存。縄をかけさせ、其座にありあふやつばら、一〳〵めしとりきたりし、御せんぎもがな」

といへば、円山梅軒

「出来たく。かけおちしたことは、自業自得課。只今御聞なさるゝ通で御座れば、契情めを吟味致し、友仲ありかを聞出す迄は、高使住吉公には先あれなる一間へ御入下さるべし」

といへば、

「しからば、身はあれにて休息いたさん。上よりおあづけとの友仲、かけ落と有ては身もたゝず、各も難義たるべし。急度吟味せらるべし」

とて、高使は奥にぞ入給ふ。

◆**かくれもない**　広く世間に知れわたっている。有名である。狂言の冒頭にある自己紹介中における常套文句である。「是は入間に隠れもない何某でござる」〔狂言記・入間川〕等。

◆**御尤千万**　千万は接尾語。もっとも至極。まことに当然。「是はお奴様のが御尤千万なれ共」〔南嶺・大系図蝦夷噺・三・三〕

◆**仮令高使住吉様御預りとあればこそなれ**　たとえ（友仲殿が）高使住吉様お預かりの身になったといっても。「仮令（ケリャウ）先のお客、旦那ほどに存ぜねばこそ、仕負せて参れ」〔其磧・傾城禁短気・二・三〕

◆**相もおとらぬ**　対等な関係である。「あひもおとらず、諸大名の御用何ほどにても事をかゝず、家栄へて今、妻子は」〔西鶴織留・一・二〕

◆**隙をとらんとすれば**　時間かせぎをしようとすると。

◆**おとしまいらする**　ひそかに逃がし申し上げる。「愚僧は衆会（しゅゑ）の座敷を忍び出で、おん身を落とし申さんために参りたり」〔謡曲・親任〕

◆**かぶりをふり**　頭を左右に振って、不承知をあらわす。「それではたらぬ顔して、かぶりふる」〔西鶴・好色一代男・八・一〕

◆**内証から**　こっそりと。「百連公の我事を影にていかやうにいはるゝぞ。内証から自今以後しらせてくれと頼べし」〔其磧・都鳥妻恋笛・五・三〕

◆**ぼつ付きたれども**　追っていったが。「山鳥の……いまだ片生（かたいき）にしてかけ廻りしをあなたこなたにぼっ付」〔西鶴・武道伝来記・八・四〕

◆**かけ落**　行方をくらますこと。逐電。出奔。「そなたも我も主君につかへて断なく出れば欠落（カケオチ）同然」〔御前義経記・三・二〕「かけ落したる段定めて」〔南嶺・大系図蝦夷噺・四・三〕

◆**ありあふ**　そこに居あわせた。「ひきが子共、むこの児玉党など、ありあいたる者は皆うたれにけり」〔愚管抄・六・順徳〕

◆**やつばら**　【奴儕・奴原】（「ばら」は複数を表わす接尾語）やつら。連中。「我が弓の力は、龍あらばふと射殺して、頸の玉は取りてむ、遅く来るやつばらを待たじ」〔竹取物語〕

◆**もがな**　願望を表わす終助詞。「我は又、女のなき国もがな」〔西鶴・好色一代女・一・一〕

◆**出来たく**　（相手の成果をほめて感動詞的に用いる）うまくやった。でかした。「死骸をふまへ突っ立ば雑式を始として、元信其外門弟等出来た出来た、あっぱれあっぱれ御分別後覚也といさみをなす」〔近松・傾城反魂香・中〕

◆**自業自得課**　自業自得によってまねいた果報、結果。「刀でうぬが首。ころりと落すは自業自得果」〔浄瑠璃・ひらかな盛衰記・二〕

◆**身**　自称の代名詞。中・近世において、目上の人が目下に対して用いた。「それを身が知ることか。旦那坊主にお問いなされ」〔近松・

心中天網島・上」

◈たゝず　面目がそこなわれる。「ゐなか者にし負けては此の与兵衛　かたたぬ」〔近松・女殺油地獄・上〕

【校訂本文・二】

円山入道ははや一国を丸のみの心に成て、

「契情是へ引出せ」

とあるに、あらけなくも縄目つよく、引舟・やり手・牽頭・料理人の八兵衛まで、一所に白砂へ引すゆれば、右近、三郎左衛門縁がわへ出て、

「コリヤ〳〵、よく〳〵合点せい。そち達は此辺いまだ見物せざるによりて、自分の慰に罷下り、桜のおほひ屋敷と見て、あんないなしにはいつてゐたものであらふな。しからばわか殿様とは近付でもあるまい。ちかづきでなければどつちへ御ざつたやら、コリヤしらぬ事はナ、よもやしるまい、板ひしぎになり、水ぜめにあふても、人はこゝひとつじや」

と、むねをおしへて問かくるを、太夫はさすが粋の道とてのみ込うなづくを、梅軒つゝと出て、

「ハテ扨、御両人は、せんぎはなされいで、後生ぎらひなおやぢに念仏すゝむる様なあいさつ。それではまいるまい。ヤア侍衆。天秤責の用意〳〵」

と、かさからかゝつてきめつくれば、太夫は、

「ハテ、どなたかは存やせぬが、しらぬ事は問れてもすゞしひわいな、きぬ〴〵のわかれに、客さんがたのむりいはんすも、又来る為の手くだのことばと、さきぐりをしてつとめて来た身、てんびんとやらいふげびた責より、水責とやらんの水な問かた、おやかたのせつかんに井戸へつられし事はかぶろのむかし、さい〳〵覚えのありし事」

と、びんとした返答に、円山入道ゆらくとすゝみ出て、

「につくい女めがほだぼね、木馬責」

といかられしが、見れば見る程うつくしいおもざし。「若天人ではないか」と眉毛ぬらして見ても、心のぼんのうさかんに成て、俄にほれくとなりしは、恋はくせものとぞ聞えし。

「何と梅軒貫左衛門、女をせめとふとて、縄かけしとはあまりの無骨」

といはるゝ目づかひからが色をもたせて、勾鼻に黒皺よせ、細眼に成て見とれしは、下手の細工の仕上せぬ、象のかしらにさも似たり。本粋中粋田舎の粋、粋自慢粋ごかし引まろめて仕て来た道しり。「さてはわが身に来た目つき」と、

「申、一たんかゝりし此縄、いかにお情ぶかひおまへの御ことばでも、筋がたゝねば解れてのうへのちじよく。皆の衆そうじやないか」

といへば、やり手のまんがつき出したやうなどつてう声して、

「そうで御ざんすとも。くるわへかへりてもしばられ出じやといふてつとめはなるまい。わけがたゝずばとかれなさんな」

と、しばられてゐる縄を下紐あしらいにいへば、引舟のつなでは、

「人をつなぎ付たるくせ有て大勢よつて御ざんすとの達の中で、ちとおとしはゆきたれども、アノ縄かけたは能ない事と、情のまじりし御隠居様を、厚鬢にしてもみうらが着せまして見たいナア」

と太夫にさゝやくもきけがしの中音。円山はなひもせぬあたまを手をやり、鬢なでる心の内、にはかに頭巾取出し、ひたいにておりこみ、ゐもんつくろふぞうたてけれ。

太夫はいた眼つきして、

「いかにも、わか殿さんは御在番の節は折〳〵のなじみなれども、見物がてらおしかけて下たを見かけて、はづさんす。かけおちとやらんは、初心なふり様、惣じて若とりのつばさのかるいきやくより、年の功のある殿たちこそ、しつほりとして逢心がよけれ」

と、もたせぶりにいふに、円山入道はそゞろ心になり、

「しかれば、今では友伸ことは思ひきる心か」

と、根をおせば、

「いかにも。いとしかつたれとも仕様がわるさに、にくふて〳〵」

さりとは、いとしかはいゝあまりの心を、詞にさかさまにいふてさとられじとする女郎のいるま詞ぞ奥ふかし。

◈**丸のみ**　ことごとくのみ込むこと。全部乗っ取ること。吉田の家を丸のみにしたいとて、させうか。（近松・双生隅田川・三）

◈**あらけなくも**　荒々しく。ふみ殺すぞと。あらけなくいへば。その勘当忝いと内へかけ入て（南嶺・忠盛祇園桜・五・一）

◈**引すゆれば**　すわらせると。うずくませると。本来は「ひきすう」てわ行に活用したが、室町時代頃からヤ行にも活用するようになった。「花のやうなる上臈たちを、三条の河原へひきすゆる」（恨の介・上）

◈**合点せい**　事情を理解せよ。「天狗といふものは、めいよ人の心におもふ事を其まゝに合点（かつてん）をする物ぞかし」（西鶴・諸国はなし・四・三）

◈**ナ**　間投助詞。文節末にあって調子を整えたり、軽く詠嘆の意を添える。「四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼に劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆夷は劣れり」（徒然草・一〇六）

◈**板ひしぎ**　板で体をはさんで、押しつぶす拷問の一種

◈**水ぜめ**　昔の拷問の一種。仰向けに寝かせて、顔面に絶えず水を注ぎかけ、または絶えず水を飲ませるなどして苦しめるもの。水せめ、火責の拷問にあふとても（浄瑠璃・傾城島原蛙合戦・三）

◈**むねをおしへて**　「むね」は「旨」で、事の意味・趣旨。

◈**粋の道**　いきなやり方。事情を察した方法。

◈**後生ぎらひ**　仏法や信心を嫌うこと。「伏見にかくれなき後生嫌ひ」（西鶴・日本永代蔵・二・二目録）

◈**天秤責**　両腕を伸ばして背で天秤棒にしばりつけ、身体の自由を奪って責める方法。「何責かよからうな。木馬（きうま）に乗せうか、水をくれうか、火熨（ひのし）責か」（浄瑠璃・仏御前扇車・二）

◈**かさからかゝつて**　「かさから出る」「かさにかかる」に同じ。相手を威圧する態度に出る。高飛車に出る。

◈**きめつくれば**　しかりつけると。叱責すると。「『いふことあらばサア問ふ』と、にがにがしくきめ付けられ」（近松・冥途の飛脚・上）

◆**すゞしひわいな**　何も困ることはない。
◆**さきぐりをして**　本来は邪推する意だが、ここは、逆で、いいように解釈すること。
◆**げびた**　いやしい。下品な。「難波屋の家に疵付るか、げびた奴めと叱られてかぶりふり」〔近松・寿の門松・上〕「下卑　ゲビ」〔書言字考〕
◆**さい〳〵**　くりかえし。何度も。「湯風呂といふ物もさい〳〵いればくたびれが参つてよはる道理」〔南嶺・教訓私儘育・四・一〕
◆**ぴんとした**　しっかりとした様子で。「大かた思ふても見てくださんせと。ぴんとしてうけねば」〔南嶺・忠盛祇園桜・二・二〕
◆**ゆら〳〵と**　ゆっくりと。ゆったりと。「風に乗るが如く、糸もて空より吊りたるやと、ゆら〳〵として台上」〔庭鐘・莠句冊・五〕
◆**ほだぼね**　未詳
◆**木馬責**　昔の拷問の一つ。背のとがった木の馬に罪人をまたがらせ、両足に石をつり下げるもの。きうまぜめ。「大坂にて水ぜめ木馬ぜめ、さまざまのせめにあひ候へ共、おち不申候由」〔月堂見聞集・一〇〕
◆**眉毛ぬらして見ても**　（欺かれないように）まゆに唾をつけて見ても。「ばかさるることではないぞ。まずまゆげをぬらさふ」〔狂言記・狐塚〕「そろ〳〵狐の側へゆけば、狐は眉毛をぬらして居る」〔咄本・管巻（安永六年刊）〕
◆**ほれ〳〵と**　深く心を引かれ。「内入よきにお次もほれぼれ」〔浄瑠璃・夏祭浪花鑑・六〕
◆**恋はくせもの**　恋のためには心も乱れ、思いかげないことをしでかすというたとえ。「樽屋是を見て、扇子拍子をとりて『戀はくせもの皆人の』と曽我の道行をかたり出す」〔西鶴・好色五人女・二・三〕
◆**無骨**　無作法かつ不風流。「山家（やまが）に育たる無骨者」〔浄瑠璃・ひらかな盛衰記・一〕
◆**目づかひからが**　目くばりからして。目つきを見るだけでも。「すべて女郎と申すは偽をいふて御客をのぼせなづまぬ客にもいてゐる目づかひに。啌をうるのが商売と。はやり歌にさへ諷ひますに」〔南嶺・教訓私儘育・二・一〕
◆**色をもたせて**　色気でせまる様子で。
◆**細眼**　ほそくひらいた目。「急げやっと片頬に皺面片頬に細目」〔浄瑠璃・本朝二十四孝・四〕
◆**下手の細工の仕上せぬ。象のかしら**　へたな細工師の作った仕上げもきちんとしていない象の頭のようなもの。みにくいさま。
◆**本粋**　ほんとうの粋の道にかなった人。「両色里の太鞁本透（ホンスイ）になされ」〔西鶴・日本永代蔵・二・三〕
◆**中粋**　自分では粋人と思っているが、実は素人の域を出ない者。「此人（＝嵐小六）の所作……立派にないなどゝいふ説は、素人の内にても生粋（なまずい）の説にて取にたらず」〔評判記・古今役者大全・四〕
◆**粋自慢**　粋であることを自慢していること。またその人。「亭主の粋自慢、そなたの井手の蛙に負けぬ物あり。色里に心をはこぶ者のたしなみを見せ申さんと」〔好色万金丹・四・四〕
◆**粋ごかし**　粋人とおだてあげて自分の都合のよいように事を運んでしまうこと。「あの先生、ゑら粋じやと粋ごかしのことはり」〔秋成・諸道聴耳世間猿・二・三〕
◆**引まろめて**　いっしょくたにして。「ひとつ〳〵いふまでもなし。世界の色をひんまろめた艶顔」〔南嶺・教訓私儘育・五・一〕
◆**道しり**　男女の道をよくわきまえている人。ここは大夫吉野のこと。
◆**わが身に来た目つき**　自分に惚れたがための目つき。
◆**筋がたゝねば解れてのうへのちじよく**　道理にかなわなければ、いくら縄を解いてもらっても私の恥になる。
◆**つき出したやうな**　威勢のいい。
◆**どつてう声**　怒張声。怒ったりどなったりする声。「きりきり行けと伝八が。どっちゃう声にびっくりし」〔浄瑠璃・夏祭浪花鑑・四〕
◆**しばられ出**　縄につながれていた身。
◆**わけがたゝずば**　理屈が立たなければ。「かふした訳故続けて振って、真の枕を交さなんだとある、分（わけ）の立つ術を仰聞かされて」〔其磧・傾城禁短気・五・三〕
◆**とかれなさんな**　縄を解いてもらうな。
◆**下紐あしらいにいへば**　下紐は下着の紐。（縄を解くことを）下着の紐を解くのと同じように言うと。
◆**つなぎ付たるくせ**　人を搏ることに慣れている
◆**おとしはゆきたれど**　年はとっているが。
◆**厚鬢**　髪形の一。頭の中央から額へかけて髪をせまくそり落し、左右にふさふさと結い分け、髻を高く結った髪。昔、神主などが結った髪の形で、上品、温雅なものとされた。「今は残らず喰込て何をすべきたよりもなく、むかしの厚鬢もうすく、仁体おかしげなれば」〔西鶴・日本永代蔵・二・二〕
◆**もみうら**　紅色で無地に染めた絹布。和服の袖裏や胴裏などに使う。

「黒羽二重の大ふり袖に、梧銀杏のならへ紋、紅（もみ）うらを山道のすそ取。わけらしき小袖の仕立」〔西鶴・好色五人女・四・一〕

◈**きけがしの**　聞けと言わんばかりの。「父には願ひ夫には聞け、きけかしも恋のかせ」〔浄瑠璃・伽羅先代萩・八〕

◈**中音**　高くも低くもない、中くらいの声。「燈火の影を少し背きて、源氏・伊勢物語を中音（ちうおん）に読みてゐて外へは心をうつさず」〔其磧・風流曲三味線・一・一〕

◈**なひもせぬあたま**　ちょんまげを結ってもいない頭。円山は入道姿。

◈**ゑもんつくろふ**　ここはすかたかたちを整えようとする様。「見向きもせず、衣紋繕ひ立帰る」〔浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・一〕

◈**いた眼つき**　未詳。

◈**在番**　江戸時代、幕府の役人が、京都の二条城などの警備のために赴任することを念頭においた言い方。「丹波の国の大名悠樹左衛門大夫。在番ゆへ召出され」〔南嶺・丹波与作無間鐘・一・二〕

◈**下た**　逃げていった。

◈**はづさんす**　なじみ客からはずしました。

◈**初心なふり様**　色の道に慣れていない初心者のする遊女のふり方。

◈**若とりのつばさのかるいきやくより、年の功のある殿たちこそ、しつほりとして逢心がよけれ**　若くてすぐどこかへ行ってしまうような客よりも、年をとった客の方が落ち着いていて、相手をしていても気持ちがよい。

◈**もたせぶり**　相手の気を引くような思わせぶりな言動。「文をやりても、返事なし。さだめしこれはみづからにもたせぶりにて有らん」〔近松・世継曾我・二〕

◈**そゞろ心**　そわそわして浮ついた状態。「まめやかには、昔あやしきそゞろ心のつきて、」〔うつほ物語・国譲・中〕

◈**根をおせば**　念を入れて尋ねると。「物ごとのきはまりを知侍ることをば、底を尽して知るといふはよろしう侍るを、かたつ田舎人は、根ををしてなど云り」〔かた言・五〕「いやならん返事ならば、逢たまふかと、根を押（をし）てとへば」〔西鶴・好色二代男・三・二〕

◈**仕様がわるさに**　やり方が悪いので。

【校訂本文・三】

明石梅軒父子は、

「申し、円山様。急にせめとはいでは住吉殿への申わけがおそなはりませふか」

とあせれば、円山は色にほだされ十方にくれて、

「いかにも〳〵、なめ過た女めがいゝぶん　あまりにくき程に、縄付のまゝ、身が隠居屋敷へ引たてゝ責べし。つきぐの縄付どもは、其方屋敷へ引たてらるべし。あの女がいふ所では、友仲をそしり口なれば、あいづでおとしたも見えず。扨〳〵、につくいめらうめ」

とにらむ様で、片眼は塩の目。「かはゆひぞや」といひたい詞も、人目あれば、是も入間様にやつて心をもだつかせば、梅軒父子

も、日頃円山が色深ひに気がつき、「扨は又例のほの字」とは思へども、親と子の中にて指合くり、

「おやじ様、コリヤ円山様の仰次第になされて」

といへば、

「身もそふ思ふ」

といふにいさみて、円山はほた〳〵ゑみ。

「ソレ、何かなしに契情を身が隠居屋敷へ引たてよ」

との詞の下、かしこまりしと縄取ども皆〳〵引立行にけり。

右近・三郎左衛門はさしうつむひて聞てゐたりしが、本より若殿の行衛太夫がしるべき様もなく、そのうへ此契情円山にくどきおとさるれば、若殿のやまひぬけと云もの。又円山をいやがらばその内犬を入れて、円山が手だてどもを聞出す梯子、これにまさる物はあるまじと、

「コリヤ、円山様の御せんぎ御尤千万。白状してもせいでも此様子を外へはなしては御国の外聞なれば、御隠居屋敷をそとへ御出しなされず、末はいか様ともおぼし召まかせが、よかりさうに存まする」

ともつてまいれば、

「そなた衆両人の心をはかりかねて居申た。いかにも一代身が所より外へ出さぬ工夫あり」

と、図にのつたあいさつ。

「したが、住吉殿へ、友仲行衛の事はいかゞ申べき」

とあれば、右近は存の外ゑがほを作り、
「今日只今より御主人と申は円山様　とても尋出してからが上向のすまぬ若殿。ナント三郎左、こゝは思案所では有まひか。代々の知行にはなれふより、円山様次第に成て御加増でもいたゞくが上分別といふもの」
といへば、
「アゝ、いかにもそふじや。あやまつた。物事を堅ふいふはむかし細工で、当世にあはぬ。妻子けんぞくをかへりみぬは智恵なの沙汰。身共も円山様の仰らるゝ事は、たとへこんにやくで竹の根をほれと仰られても、そむかぬ心にきはめた」
といふに、円山大に安堵して、
「梅軒父子の中では申にくけれども、何をかくさふぞ。悪縁でがなあらん。あの太夫とやらにほれて〳〵心で心をせいしても中〳〵とまらぬ。こゝはよき様に思案たのむ」
とあれば、三郎左衛門追取、
「いやと申さば、ぶちころしておしまひなされませい。命にかへていやと申さぬがつとめのはかなさ」
と、かうばりをかふにぞ、
「したらば、住吉殿へは何と申さふ」
「ハテかうがよからふ」
といづれも耳と耳、さゝやき合て鈴をならせば、住吉左京太夫立出給ひ、
「友仲ゆく衛はしれ申たか」

とあれば、

「京都へまかりのぼりしよし、契情が白状なれば、一先御帰京下さるべし。おつつけ円山宝の珠皿持参いたし申べし」

と聞て、

「しからば、身は早く上京すべし。友仲にをつつきめしとらへつれ帰らん。御苦労千万、さらばく」

とたちいでたまへば、御供の行列常とはちがひ、友仲にをつつかんと、のり物はあとよりと馬ひきよせてゆらりとのり、

「いづれもつゞけ。友仲はかち路なるべし」

と、一鞭くれて、やるまいぞく。

◆**おそなはりませふ**　おそくなりましょう。「あしたにみてゆふべのをそなはるほどだに紅のなみだを落すに」〔うつほ物語・俊蔭〕「去年は木の芽峠の大雪にささえられ、当年迄おそなはっては御ざれども」〔狂言・餅酒〕

◆**十方にくれて**　「途方にくれて」と同じ。「式部十方にくれて、暫く思案しすまして」〔西鶴・武家義理物語・一・五〕「斑女は十方にくれて」〔其磧・都鳥妻恋笛・三・三〕「何とせふぞと十方にくれて」〔南嶺・今昔出世扇・三・二〕などこの表記例は多い。

◆**なめ過た**　あまりに馬鹿にした。「いや、なめすぎたやつらかな」〔浄瑠璃・根元曾我・二〕

◆**縄付**　縄でしばったまま。「此のおめでたい道中に縄附などは見ぬものと」〔近松・丹波与作・中〕

◆**其方**　対称。対等もしくは下位の相手に対し武士・僧侶などが用いる。町人が用いるときは荘重な表現となる。

◆**そしり口**　わるくち。「心かだましく、譏口（そしりぐち）勝ちて、己が利口をふるまふとて」〔秋成・世間妾形気・一・一〕

◆**めらうめ**　女をののしっていう語。「どっかとすはりとがり声、めらう下にけつからふ」〔近松・心中天網島・中〕

◆**塩の目**　目許を細めたあいきょうのある月つき。「目を細めておかしい目付きが気に入らぬ、四十、五十に余って、しほのめの時分かいの」〔浄瑠璃・当流小栗判官・四〕

◆**入間様**　入間言葉に同じ。「むかし山崎の宗鑑法しと云しえせもの、かしましや此さとすぎよ郭公（ほととぎす）みやこのうつけさこそ待らんと読侍しは、いとことさめてにくきやうなれど、是はいるまやうとて、狂歌狂句の本体とこそ承はれ」〔かた言・五〕「入間様、又入間詞といふも同じ逆詞なり。是に二種あり。一は意を逆に言なり。一は詞を逆にしたるなり。意を逆にいふとは、花散れ、月くもれなどの類なり。詞を逆にするとは、花の雲といふべきを、雲の花といひ、月の鏡を鏡の月といふ類なり。余は准じて知るべし」〔柳亭筆記・三〕

◆**もだつかせば**　じれったがっていると。「床などの事思ひもよらぬに、太夫方からもだついて来て屏風立てさせ」〔其磧・傾城禁短気・四・一〕

◆**色深ひ**　色けが多い。また、色欲が強い。「その比（ころ）都に隠れもなく、色深（ふか）き男どもあり」〔仮名草子・恨の介・上〕

◆**ほの字**　ほれること。「そもじにたんとほのじじやと、嬉しいか」〔浄瑠璃・平家女護島・三〕

◆**指合くり**　気を遣って。元来は、俳諸の席で、差合の有無を調べたり、そのことについて相談することをいう。

◆**仰せ次第になされて**　おっしゃる通りになさって。「御心やすく思召御ともさせ参らせん。それかし次第になされよとちごのすがたにつくりなし」〔浄瑠璃・凱陣八島・二〕

◆**ほたくゑみ**　機嫌のよい笑い。「其五十両渡すと悦んで戴き、ほたほたいふて戻られたは」〔浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・六〕

◆**何かなしに**　つべこべ言わずに。「何角（なにが）なしに、乗うつりて、皆こころやすきつき合」〔西鶴・好色一代男・五・七〕

◆**隠居屋敷**　隠居所。「大分の田地、海山迄ほでてんごうにしうしなひ皆人の物になし、漸（やうやう）と残ったゐん居やしき」〔近松・天神記・三〕

◆**縄取ども**　大夫らの縄を持っている家来たち。「はっと答へる縄（ナハ）取に、引立られて」〔浄瑠璃・鎌倉三代記・六〕

◆**やまひぬけ**　やっかいな事からぬけだすこと。「源五兵衛様があの様に言うて下さんしたので、三五兵衛様の方は病脱（やまいぬけ）がしたワイなア」〔歌舞伎・五大力恋緘・一幕返し〕

◆**犬**　探偵。スパイ。「こなたのことで此の在所（ざいしょ）は、大坂からいぬが入」〔近松・冥途の飛脚・下〕

◆**梯子**　手がかり。大夫から円山にお家乗っ取りの計画を話させ、それをスパイが聞き取って悪事の証拠にしようという計画。

◆**外聞なれば**　ここでは、外聞が悪い、あるいは外聞にかかわるの意。

◆**一代**　生きている間ずっと。「一代の外聞ほうばい衆へも盃事、いとまごひも訳よふしてゆるりと出して下さんぜ」〔近松・冥途飛脚・中〕

◆**図にのつた**　調子に乗った。「強そろへを言立つれば山伏も図に乗って、強ふ見せんと拳（こぶし）をにぎりひぢを張」〔浄瑠璃・ひらかな盛衰記・四〕

◆**したが**　けれども。「殺したやつもまだ知れず気のどく千万、したが、追付（おっつけ）知れましよと」〔近松・女殺油地獄・下〕

◆**存の外**　意外にも。「利徳存（ぞん）の外に取こみ、俄長者となりしも」〔西鶴・懐硯・四・一〕

◆**上向のすまぬ**　お上に対しての言い訳が立たない。「上（かみ）向きだに済み候事ならば、市郎右衛門方へ宿替の事相談に及び」〔耳袋・一〕

◆**上分別**　最も的確な判断。最もよい考え。「ただ沙汰なしに取り置くが上分別（じやうふんべつ）成べし」〔其磧・傾城禁短気・四・四〕

◆**むかし細工**　古風。

◆**こんにやくで竹の根をほれ**　「蒟蒻で石垣を築く」「蒟蒻で岩かく」等と同じく不可能なことをいうことわざ。

◆**悪縁**　離れにくい間柄。大夫に対する恋情をいう。「いかにじゅんのたがへばとて、あくゑんはむすばれず」〔浄瑠璃・凱陣八島・一〕

◆**がな**　（疑問の係助詞「か」に詠嘆の終助詞「な」の付いてできたもの）漠然と例示する意。「いやそれは私寝言がな申たか。ただしお前が病（や）みほふけて空耳でかなござりましよ」〔近松・重井筒・中〕

◆**追取**　相手の言葉をすぐにひきとって。「『皆の者もお近付になってお礼申てくれ』とあれば、彌七おっ取て申上るは」〔其磧・傾城禁短気・五・二〕

◆**ぶちころして**　なぐり殺して。「そいつ共にぶちころせ」〔近松・用明天皇職人鑑・三〕

◆**かうばりをかふにぞ。**　あと押しをするのに対して。「かうばり」はつっかい棒のこと。「あんまり母があいだてない、かうばりが強ふて、いよいよ心が直らぬと、さぞ憎まるるは必定」〔近松・女殺油地獄・下〕

◆**をつつかん**　あとから追いつくだろう。「をつつく」は「おいつく（追付）」の変化した語。「いまだ遠くはおん出で候ふまし、それがし追っ付き留め申さう」〔謡曲・鉢木〕

◆**かち路**　徒歩。「後には三枚肩をやめて歩行路（かちぢ）に家質（かじち）置て其銀会所よりすぐに道頓堀に沈みける」〔浮世草子・椀久二世・上・銀にならざる笹の浮世〕

◆**やるまいぞく**　狂言末尾の常套文句。「やいくたらしめ、どこへやることでないぞ、やるまいぞくく」〔狂言記・入間川・末尾〕など。

会員の所属一覧

木越　治　金沢大学文学部

高島　要　石川工業高等専門学校

高橋明彦　金沢美術工芸大学

村戸弥生　韓国霊山大学

穴倉玉日　本学大学院社会環境科学研究科

木越秀子